

## 解 答

- 一 問一 春の明るい太陽の光が、流れる川の水面に反射し、きらきらと輝いている情景。
- 問二 川の水はたえまなく流れ、海に注ぎこむ。それを受け止める海の底知れぬ深さとゆたかさが、子を受け止め、包みこむ母の愛情の深さと重なるから。また、寄せては返すという営みを永遠に繰り返す、その絶対的な確かさは、人に安心感をもたらし、圧倒的な忍耐力を感じさせる。この点も、忍耐強く子と向き合い、安らぎをあたえてくれる母の印象と重なるから。
- 問三 川を流れる水はつねに新しく、流れた水は去っていく。時間も刻々と過ぎ去るものであり、つねに人間に新しい未来をもたらす。その意味で、人はつねに新しく生まれ変わっているといえる。「時の流れ」という言葉には、時を経るにつれて老い、古びていくのではなく、いつも新しいものを求め、みずみずしい感覚を持ち続けることへの人間の願望が映し出されているのだ。
- 問四 ① 非礼 ② 簡単 ③ 容易

## 二 問一 エ

- 問二 (1) 自分が死んだら深川の家を売り、千恵を私立中学校に通わせるための学費の足しにしてほしいということ。
- (2) Aでは、息子が自分の職業や生き方を嫌って出て行ってしまったことに対するさびしさややりきれなさ、自分が否定されたような悲しみを感じていた。しかし、息子が家族を全力で養ってきた自分の思いを理解していることや、深川の家を大切に思っていることを知り、驚く。晴れ晴れとしたうれしさを感じ、Cでは、自分と同じ覚悟で家族を守ろうという息子の姿勢を尊重し、その生き方を見守ろうという気持ちになっている。
- 問三 永代橋の向こうは、エンジの暮らしや生き方を否定し、見下すような者の住む世界で、自分とは相容れないものであったのに、息子はその世界にあこがれ、出て行ってしまった。見捨てられたようなさびしさや、気後れや嫌悪感もあったため、永代橋の向こうには行くことができなかった。しかし、息子が自分の育った深川の家を大切に思っていることや、自分の生き方を理解し受けついでいることがわかり、それまでのかたくなな気持ちと和らいだ。橋の向こうの世界から来た千恵が深川を愛しているように、自分も向こうの世界をわかりたいと思い、二つの世界をつなぐ象徴でもある永代橋を渡ってみようと思ったのである。
- 問四 ① 具合 ② 態度 ③ 案外 ④ 救急車 ⑤ 演技